

英語科定期試験のテスト細目に求められるもの

—学生へのアンケート調査から—

What is Expected in the Test Specifications of the English Language Regular Examination
-From a Survey of Students -

泉類 尚貴

福島工業高等専門学校 一般教科

SENRI Naoki

National Institute of Technology, Fukushima College, Department of General Education

(2023年9月1日受理)

The study focuses on the importance of providing detailed test specifications to students in Kosen for regular English exams. I explore the optimal timing and content of test specifications distribution, aiming to enhance students' exam preparation motivation. It reviews existing literature and proposes a model for the test specifications based on the input of students obtained through a questionnaire administered using Microsoft Forms. The findings reveal varying preferences for distribution timing, suggesting an integrated approach to teaching and testing, and also highlight the potential benefit of including specific problem examples in the specifications.

Key words: Test Specifications, Language Testing, Exam Preparation, Survey Research

1. はじめに

高等専門学校では、普通科の高校と異なり、3年次の大学受験という学習の大きな動機づけがないものの、編入試験で英語を課せられたり、TOEICや英検が単位互換となったり、英語でプレゼンテーションをする機会を持つ学生がいたり、英語の重要性は普通科高校に劣らず、あるいはそれ以上に重要である。他方、授業は高学年になるにつれて、8時限までの曜日があったり、レポートが多く課されていたり、英語の学習に割ける時間は決して多くない。したがって、英語を学習する機会として、定期試験は重要な意味を持つ。

高専は高等教育機関であり、いわゆる赤点が60点未満に設定されていること、専門科目も含めて試験の科目数が多いことから、学生に過度な負担を強いることはなく、一方で学生の試験に向けた学習への動機づけを高める手段を模索していた。この折、小泉ほか(2017)や静(2002)で示されていたテスト細目を知り、筆者の授業でも利用することとした。前期の中間試験から後期の期末試験まで、すべての定期試験で配布した。

これまでのテスト細目については複数の研究が報告されているが、Norizukiによる“*But how specific should specs be? A simpler version may be desirable for teachers or test-*

takers. But how simple should it be? And how much information is minimally essential?”¹⁾という問題提起で示されているように、テスト細目にどの情報を含めるべきかといった要素には検討の余地がある。テスト細目は、オルダーソンほか(2010)が示すように、大規模テストの作成にも用いられる一方で、小泉ほか(2017)が示すように、定期試験の作成に用いられることもある。とりわけ、定期試験については、学生の立場からどのような情報が必要となるのか、実証的な調査が求められる。しかしながら、学生を対象にしたテスト細目のアンケートについての先行研究は管見の限りではない。

そこで、本論考では、定期試験において配布するテスト細目について、学生にFormsを利用したアンケート調査を実施することで、定期試験のためのテスト細目のモデルを示すことを目的とする。まず、先行研究を基にしてテスト細目の目的とそれに含めるべき項目を整理する。そののち、学生からのアンケート結果、ならびに結果の分析を行う。

なお、本報告は筆者による実践であり、福島高専英語科全体の方針を示したものではないことをお断りしておく。

2. テスト細目の目的と含めるべき項目

テスト細目とは、「テストで何をどのような方法で測定するかを明示した設計書」²⁾を指す。テスト細目の公開範囲について、“should be made available to everyone concerned with preparation for the test.”³⁾とする研究もある。周知することで、テストの信頼性が高まるためである。

教員側にとって、テスト細目を作成することの利点は、「テストのバランスが良くなり、測ろうとする力が明確になる」⁴⁾ことである。細目、すなわち設計図を作成したうえで試験を作成することにより、配点のバランスの適切さや、授業の内容（指導）と試験の内容（評価）をより密接にすることができる。とくに後者は、内容的妥当性（content validity）を高くするうえでも重要である。

また、生徒・学生があらかじめ形式を分かっただけで学習に取り組むことで、静の説く定期テストの意義である、「そのために準備させることによって能力を伸長させる」⁵⁾こと、内容の公開により、望ましい学習を引き出すことが期待される。

細目に含むべき項目については、冒頭にあげた Norizuki が ‘...how specific should specs be?’¹⁾と述べていることから明らかに、さまざまな提案がなされている。典型的に含まれる項目として、Green では、‘typically include three elements: a design statement, an assessment blueprint and task specifications’⁶⁾と示している。オルダーソンほか（2010）では、テスト細目を作成委員のみが使う、非公開の書類と定義している。オルダーソンほかでは、細目に含めるべき項目のチェックリストとして、構成概念（テストの理論的枠組み）、測定対象の言語単位、各級における答案・解答の例をはじめとする 21 もの項目を与えている。また、小泉ほか（2017）では、生徒・学生が定期試験に向けた勉強を促進するために、テスト細目の簡易版を配布することを提案している。小泉ほかが細目に含めるべき項目として提示しているのは、① テストの目的、② 測りたい能力、③ 対象者、④ テスト範囲、⑤ テストの構成、⑥ テスト形式、⑦ 実例、⑧ 実施方法と採点方法の 8 要素であり、特に①から⑥までを作成しておくことで、テストの全体像が把握しやすくなると指摘している。

オルダーソンらの想定する細目は定期試験を想定したものではなく、入学試験や資格試験といった大規模なテストを想定したものであると考えられる。一方、小泉らの細目は、具体例として挙げられている細目が中学 2 年生の 1 学期中間テストであることから、定期試験を想定したものである。

そこで、筆者は小泉ほかで提示されている項目を基にした細目を作成し配布することとした。含めた項目は、① テストの目的、② 測りたい能力、③ 対象者、④ テスト範囲、⑤ テストの構成、⑥ テスト形式、⑦ 実例 の 7 項目である。ただし、⑦ の実例については、前期中間試験のみ含めた。

3. データと議論

調査対象者は、2022 年度、筆者の授業を履修した 3 学年の学生 78 名を対象とした。学科・科目は電気電子システム工学科（英語Ⅲ）とビジネスコミュニケーション学科（英語特論Ⅰ）である。対象者のうち、73 名から回答（94%）を得ることができた。これらの回答には、記述欄が空欄である回答など、無効となる回答はなかったため、本分析には、73 名分の回答結果を利用するものとする。

調査方法は、Microsoft の Forms を利用した。調査対象者は、これまでの課題の提出で、Forms の利用方法には習熟している。

調査した時期は、後期の中間試験を終えて間もない 12 月である。授業中に 10 分程度の時間を利用し、時間が足りない場合は授業後に提出をするよう求めた。また、個人が特定されるように情報を利用しないことを説明した。なお、授業内容そのものに対するコメント（学生に解答してもらったアンケートは、テスト細目の内容に限定した）や、成績（テストの得点）と、アンケートの回答の具体的な関係については、80 人ほどの小規模なパイロットスタディであり、個人が特定される恐れがあることから、今回は分析の対象としないこととする。一方で、回答した学生はすべて福島高専の 3 学年の学生であり、高専に入学し、進級する能力を有する学生である。また、2022 年度の筆者の授業において、再試験となった学生、すなわち年間の評点が 60 点未満であった学生は、両学科ともいなかった。

3.1 調査の内容

調査した内容は、次の3点である：

(1) テスト細目を配布する時期として、もっとも学習のしやすさにつながる時期はいつか？

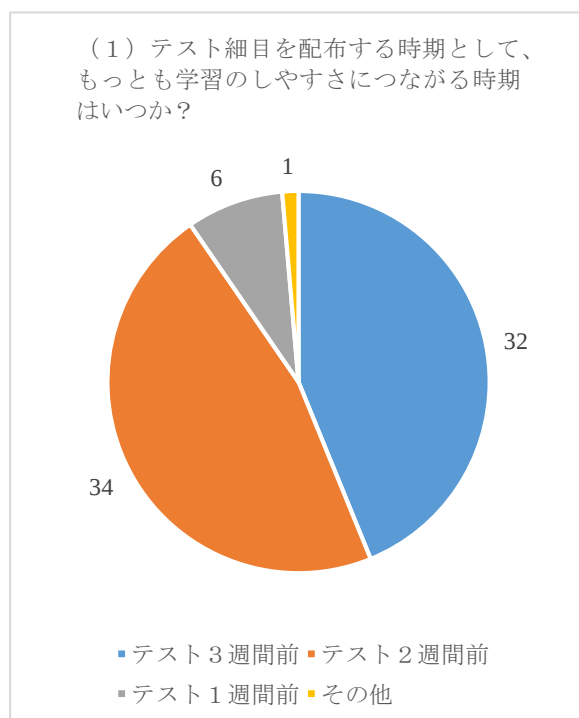
- ・テスト3週間前 ・テスト2週間前
- ・テスト1週間前 ・その他

(2) 1の理由を具体的に書く。

(3) 問題の形式・配点以外で、テスト細目に含めてほしい内容はあるか？

3.2 調査結果

配布してほしい時期、並びにその理由については、次の結果が得られた：



(2) 1の理由を具体的に書く：

3週間前：テスト範囲を全部書いてくれるのでそこを勉強すれば点を取れると思っているから

3週間前：テストのポイントを意識しながら授業に取り組める

2週間前：試験の勉強を開始する時期が2週間前であるため、2週間前に配布してほしい

2週間前：試験の日程が提示される時期

2週間前：ちょうど気合が入る

2週間前：1週間前だと遅すぎ、3週間前だと早すぎる

1週間前：本格的に対策を始める時期

1週間前：ぎりぎりにならないと集中できないのであまり前に渡されても活用できない

(3) 問題の形式・配点以外で、テスト細目に、含めてほしい内容はあるか？

・今までと同じ内容で良い、特になし…53件 (73%)

・重要な文や語句を具体的に示してほしい

・問題数を提示してほしい

・以前のように問題の形式を例で示してほしい。文章だけではどのような問題か分からないところがあった

3.3 結果の分析

(1) の配布する時期について、確かに、早ければ早いほど良いという声が多いことは予想できる。一方で、

(2) の自由記述において、1週間前の配布を求める学生のアンケートには、「本格的に対策を始める時期が1週間前」という意見や、「ぎりぎりのほうが集中できる」といった意見もみられた。また、3週間前に配布することで、「テストのポイントを意識しながら授業に取り組める」という意見があった。

テストと授業で扱う内容を一致させることで、内容的妥当性は高まるが、細目を早めに配ることで、教員も学生もテストと授業の一体化、より拡大すれば、評価と指導の一体化が図れることを示唆している。

(3) の細目に含めるべき内容については、「今までと同じ内容で良い、特になし」という意見が53件 (73%) を占めた一方で、改善策として、「重要な文や語句を具体的に示す」「問題数の提示」といった意見があった。

加えて、⑦の実例については、いくつか問題のサンプルを作成しておく、学生が解答する際の無用な混乱を避けられることが明らかである。第1回（前期の中間試験）では、次のようなサンプルを掲載した：

IV 次の文には、それぞれ品詞が誤っている箇所が1箇所ずつある。正しく直した形（1語）を答えなさい。

1. Fear of technology taking our jobs runner deep.

解答：runs

一方で、第2回以降はサンプルを特に記載しなかった。しかし、アンケートを取ったところ、「以前のように問題の形式を例で示していただきたいです。文章だけではどのような問題か分からないところがありました。」「例題が欲しい」という記述が3名からあったため、サンプルの掲載は求められるといえよう。このコメントを回答し

た学生はビジネスコミュニケーション学科で、最終成績が85点以上であった。したがって、試験で高得点をとるために、細目を活用していること・活用しようとしていることがわかる。また、ビジネスコミュニケーション学科は英語科目が英語Ⅲ・英語特論Ⅰ・英会話・Academic Reading など多岐に渡る。この科目の多さも、学生の先の回答につながっている。

4. 結語

本調査では、高等専門学校で行われる英語科の定期試験を基に、テスト細目で学生が求める形式・内容についてアンケート調査を行った。配布時期は、必ずしも早い方がよいとは限らないことが明らかになった。また、細目に加える内容は、具体的な問題のサンプルを毎回の細目に掲載することをはじめとして、小泉ほか（2017）の示しているテスト細目に含めるべき項目と概ね一致する結果となった。

今回はテスト細目についてアンケート調査を行ったが、この過程で、テスト細目に加えて、より具体的な「予想問題」の公表を求める学生の声もあった。予想問題の公開が、学生の学習への動機づけや、試験結果にどう結び付くか、実証的に示していくことを今後の課題としたい。

注 釈

- 1) Norizuki, Ken. Test Specification. 『日本言語テスト学会誌 20周年記念特別号』 Vol. 19: 2, pp. 56-60, 2016, p.59
- 2) オルダーソン・チャールズ, キャロライン・クラッ

ファミン, ダイアン・ウォール『言語テストの作成と評価—あたらしい外国語教育のために』 渡部良典訳, 春風社, 2010年, p.20

- 3) Hughes, Arthur and Jack Hughes. *Testing for Language Teachers*, 3rd ed. CUP, 2020. p.60
- 4) 小泉利恵, 印南 洋, 深澤 真編『事例でわかる 英語テスト作成ガイド』大修館書店, 2017年, p.47
- 5) 静 哲人『英語テスト作成の達人マニュアル』大修館書店, 2002年, p.139
- 6) Green, Anthony. *Exploring Language Assessment and Testing: Language in Action*. Routledge, 2014, p. 29

参 考 文 献

- 1) Green, Anthony. *Exploring Language Assessment and Testing: Language in Action*. Routledge, 2014.
- 2) Hughes, Arthur and Jake Hughes. *Testing for Language Teachers*, 3rd ed. CUP, 2020.
- 3) Norizuki, Ken. Test Specification. 『日本言語テスト学会誌 20周年記念特別号』 Vol. 19: 2, pp. 56-60, 2016.
- 4) オルダーソン・チャールズ, キャロライン・クラッファミン, ダイアン・ウォール『言語テストの作成と評価—あたらしい外国語教育のために』 渡部良典訳, 春風社, 2010年.
- 5) 小泉利恵, 印南 洋, 深澤 真編『事例でわかる 英語テスト作成ガイド』大修館書店, 2017年.
- 6) 静 哲人『英語テスト作成の達人マニュアル』大修館書店, 2002年.